お茶の水

四・二八沖縄デーのこの日、記者が半分シャッターの降りたお茶の水駅を出てまず気づいたのは、群集であった。

「霞ケ関占拠を公言している学生のことだから学生街のこのあたりでも何かやるだろう」―そんな目つきのサラリーマン、一般学生労務者など数百人が駅周辺にたむろしていた。

機動隊が取り囲んでいる東京医科歯科大を見上げると「沖縄解放」「安保粉砕」「造反有理」などの文字が見える。屋上のヘルメット姿が安田城を思わせた。

三時ごろ、機動隊は本学前付近にまで進駐した。記念館で集会を開いていた社学同統一派、それに中核派はうって出る構え。駿河台学館中庭に陣取る日大全共闘、ML派の学生にも緊張がみなぎった。

これより少し前、機動隊は本学前通りの車両の通行を禁止し"神田解放区"は機動隊の手によってすでに完成していたのである。

三時半。道路に出た赤ヘル・白ヘルの部隊がジグザグデモで機動隊に近より、一斉に手にした空ビン、石を投げるとすかさず機動隊もガス銃を発射した。飛んできたガス弾が記者の足元で炸裂し白いガスをふき上げる。水平撃ちである。安田城攻防戦では、これで実明した学生もいるというのに…。

四時十分、機動隊は放水車を先頭に攻勢に出た。逃げる学生に水が飛ぶ。しかし学生も負けない。二号館からお返しの放水。本学前通りは文字通りの一進一退が続く。

これに呼応して医科歯科大に陣どっていた、社学同、中核の約八百人も突撃隊を先頭に突っ込んだ。たちまち包囲の機動隊と激突。約二〇人が逮捕され、残った部隊は四分五裂。それを追って機動隊はあたりかまわず催涙ガスを乱射。このうち数発は窓ガラスを破って医歯科大の病棟にも入ったというやがて態勢を建て直した学生達はそのまま東京駅へ向う。

記者の耳に激しい口調の怒声が飛び込んできた。振り返ると医科歯科大に立てこもっていた黒ヘルの学生に患者の付きそい人らしい男がくってかかっているのであった。

「貴様らは病人を人質にしていいと思っているのか」

「沖縄では百万人が人質になっているんだ」と黒ヘル学生。

本学前通りでは小川町校舎の前カフェテラス西部の脇、さらに大学院の横にもたちまちバリケードが築かれる。学生達は機動隊が攻めるとバリケードあるいは校舎に逃げ、機動隊が引くと再び飛び出して投石するという巧みな戦術をとったため、機動隊の攻撃はいつも空振りだ。記念館のポールには赤旗と黒旗が"解放区"の象徴のようにへんぽんと風に翻っていた。

記念館、一号館、二号館、それに七号館には見物の一般学生が鈴鳴り、ヘルメットの学生が叫ぶ「沖縄解放」「安保粉砕」のシュプレヒコールも彼らの耳には単なる物理的な声としてしか達しないらしく反応はまったくない。顔前の活劇を見るかのごとき表情の顔顔、顔が並んでいる。記者はある種の腹立たしさを覚えずにはいられなかった。

しかしお茶の水周辺には敷石などは一枚もないはずなのに散乱したこのおびただしい石は―。記念館中庭に一歩入ってみるとこの素朴な問題は氷解した。コンクリート製のベンチが根こそぎ骨組みだけになっているではないか。武器というものはいざとなればいたるところにもあるものだ―。

五時近くになって、機動隊は東京駅方面へその主力を向けねばならなくなったせいか一応お茶の水橋の方に引き上げてしまった。そのころから群衆も帰り始め、"解放区"に白黒車が走り出した。

学生達もこれを契機に拠点となっている新橋に三々五々移動を開始し、六時過ぎにはお茶の水周辺から学生の姿はほとんど消えうせてしまった。学生がいないのを知ってか知らずか機動隊の"陽動隊"が時折、歓声をあげつつ本学前通りを駆け抜けて行く。その機動隊も七時過ぎにはお茶の水を去り、闘争は完全に新橋方面に舞台を移した。

夜のお茶の水―さっきまでの激戦はまるで嘘のような静けさである。路上の無数の石がネオンの光を反射し、取り残されたバリケードがグロテスクなその姿を無言に横たえているだけであった。